2011-2012 年度 ITP-EUROPA 派遣報告書

１）氏名

小久保真理江

２）派遣先

ボローニャ大学（Università di Bologna）

３）派遣期間

平成 23 年 9 月 17 日～平成 24 年 7 月 31 日

４）派遣の概要

去年に引き続き、共同学位授与制度のもとでボローニャ大学に留学し、ニヴァ・ロレンツィーニ先生の指導を受けながら、２０世紀イタリアの作家チェーザレ・パヴェーゼについての研究を進めた。派遣先での研究テーマは「チェーザレ・パヴェーゼの作品におけるアメリカ文学・映画の影響」である。派遣二年目となる今年度は、同主題についての博士論文執筆に集中的に取り組んだ。

具体的には、昨年度の派遣期間中に集めた文献情報や分析結果などを活用しながら、博士論文の構成計画に沿って、執筆しやすい節や優先的に取り組むべき節から書き進めていった。一つの節ごとにネイティブチェックを受け修正原稿を指導教員に提出し意見を伺うという形で作業を進めていった。指導教員に提出する前のネイティブチェックを誰に依頼すべきかということが常に大きな悩みの種であったが、幸い何人かの優秀で親切な友人に添削を引き受けてもらうことができた。指導教員は、毎回内容的な助言だけではなく、文章表現に関する問題点や修正案を原稿に書き込んで下さった。こうした友人や指導教員の綿密な添削のおかげで、論文の文章をより厳密で滑らかな文章へと改善することが可能となった。指導教員や友人の添削をパソコンで原稿に反映させる際には、修正点の傾向を分析し、その後の原稿執筆にも最大限活かせるように心がけた。

また、指導教員の助言を受けながら執筆を進めていくにつれ、博士論文の構想も改善されていった。暫定的な構想をもとに柔軟な姿勢で執筆を進めていくことによってよりよい論文構成やアイディアが生まれてくるということを改めて強く実感する経験であった。執筆を進めていく上では、日本の指導教員の助言や励ましにも大いに助けられた。本学側の指導教員がボローニャに短期滞在した際には、論文提出や審査手続きに関する話し合いを関係者全員で直接行うことにより様々な疑問や問題を解決することができ

た。

最終的に博士論文では、パヴェーゼとアメリカ文化の関係について、文学と映画に焦点を当てながら、三章に分けて論ずることとなった。第一章では伝記・批評に関する考察、第二章では歴史文化背景に関する考察、第三章では詩作品に関する考察を展開した。最終的な博士論文の題は 「パヴェーゼ、文学と映画 ―アメリカ神話に関する新たな解釈 （Pavese tra letteratura e cinema: nuove prospettive sul mito americano）」に決まった。

今年は論文執筆で非常に忙しかったため、大学の授業やシンポジウムなどに頻繁に出席することはできなかったが、執筆作業の合間に、複数の授業やイベントに出席した。なかでもステファノ・コランジェロ先生による大学院の講義やレモ・チェゼラーニ先生による講演からは、現在の研究だけでなく今後の研究・教育活動にも役立つ貴重な示唆を得ることができた。

５）派遣の成果

今年度の派遣の最大の成果は、博士論文の完成と提出である。イタリアの作家パヴェーゼとアメリカ文化との関係をテーマとする博士論文の執筆には、イタリア・アメリカ両国の言語・文化についての広範な知識が必要とされるため、論文執筆の準備には長い年月がかかった。様々な関連先行研究が存在するテーマでもあるため、これらの先行研究の傾向を正確に把握した上で説得力と独自性を備えた議論をいかに展開するかということも長年の困難な課題であった。しかし、博士論文共同指導制度と ITP-EUROPA の支援のもとでボローニャに長期滞在することにより、十分な資料調査を行い論文の核となる重要な着想を得ることができた。

また、イタリア語運用能力の向上も派遣の大きな成果として挙げられる。この一年間多量の文章を執筆し推敲を重ねた上で綿密な添削を受けるという経験を積むことにより、イタリア語の文体、様々な言葉のニュアンスや使い分けについて多くを学んだ。 指導教員の求めるレベルの文章を書くのは容易ではなく、最初は一つの節を書き上げるのに非常に長い時間がかかったが、少しずつイタリア語での論文執筆にも慣れていき、進度を上げることができた。執筆開始当初は「日本語で考えたことをイタリア語で書く」という感覚であったが、次第に「イタリア語で書きながらイタリア語で考えを練る」という感覚に変化していった。こうした意味でも、ボローニャ大学の指導教員から綿密な文章添削を受け、議論展開や文章表現の弱点について的確な批判をいただけたのは、本当に貴重な経験であった。

論文提出締切りに向けて執筆作業に集中的に取り組んだ今年度は、今まで以上に周囲の方々の支えのありがたさを実感する一年であった。特に自らの仕事で忙しいなか多

量のイタリア語の文章を添削して下さった指導教員や複数の友人には感謝してもしきれないほどお世話になった。海外生活や論文執筆に関わる様々な困難に直面しながらも、執筆を続け論文を完成させることが出来たのは、多くの方々の協力のおかげだと実感している。 ITP-EUROPA の関係者の方々を初め、様々な形でこれまで支え励まして下さった皆様にこの場を借りて心よりの感謝を申し上げたい。

６）今後の課題

目下の課題は、９月１２日の論文最終試験に入念な準備の上で臨み、博士号を取得することである。博士論文の最終試験では、自らの研究テーマについて口頭で明確に論述し、審査員から投げかけられる様々な質問や批判に対しても的確に応答することが要求される。８月１９日から短期 EUROPA プログラムによりボローニャに滞在し、十分な準備を行う予定である。

より長期的な課題としては、これまでの研究を基盤に新たな課題に取り組み、研究成果を国内外に発信していくということが挙げられる。また、これまでのボローニャ留学中に培った経験と能力を教育活動や翻訳活動、文化交流活動の分野でも活かしていきたい。こうした今後の活動のための準備も次回の短期 EUROPA 派遣中に行う予定である。